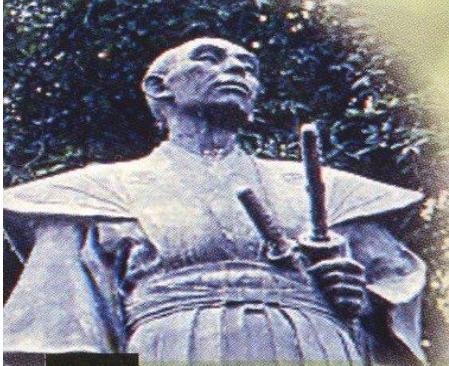


横井小楠

—その業績と生涯—



王政復古により発足した新政府は、徳川慶喜に内大臣辞退や所領返上を命じましたが、慶喜はこれを拒んで大坂城に退き、慶応4年(1868)元旦、討薩の表(文書)を朝廷に差し出しました。1月3日、会津・桑名両藩^{*}兵を含む約1万5千人の旧幕府軍は鳥羽・伏見(現京都市)で薩摩・長州両軍5千人と戦いました(戊辰戦争^{*}の始まり)が、装備で勝る薩長軍に大敗し、4月11日には江戸城明け渡し(無血開城)が行われます。その3日前の4月8日、横井小楠は新政府の要人として京都に旅立ちます。

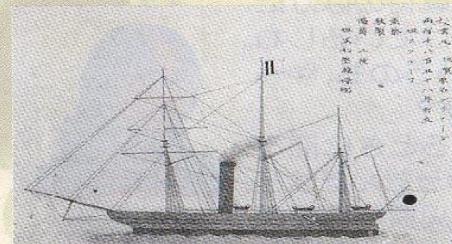
22 明治政府の参与に就任

肥後細川藩士に復し、新政府より召命された横井小楠は、慶応4年(明治元年)4月8日、坪井川河口の百貫石港(現熊本市松尾町)から肥後藩船凌雲丸^{*}に乗船し、上京しました。

同月11日に大坂に到着すると、ちょうど天皇が行幸中で、肥後藩世子^{*}の細川護久や越前藩士三岡八郎(由利公正)も供奉を命ぜられて大坂に滞在していました。三岡はすでに新政府の参与として財政を担当し、小楠の上京をひたすら待っていましたので、大喜びで出迎えました。小楠は在坂中の同年4月22日に徴士参与^{*}を命ぜられ、同年閏4月4日に京都に入りました。ところが、小楠は慢性的な泌尿器関係の病気のため外出できず、12日に初めて新政府の役所(京都御所内)に出勤しました。

小楠は入京直後から大変多忙な日々を過ごしています。自宅宛(閏4月13日付)の手紙に「京着以来、昼夜来客大ひま無しで、風邪の養生もできません。勤務は午前10時から午後4時まで彼是多用、その上退勤後、直ちに岩倉邸に参り、夜10時頃に帰宅しています。このように繁用で、誠に困っています」とあります。小楠は召出された人たちの中では最年長者で、しかも識見は抜群でしたので、岩倉具視には特に信頼され、小楠の献策が用いられていたようです。しかし、このような激務は病氣にも悪く、5月下旬より病勢は増し、高熱をして重篤になりました。7月に危険状態を脱し、9月初旬には快方に向かいましたので、同月15日より再び出勤することができました。

さて、閏4月21日、官制改革が行われ、小楠は徴士参与中から選抜



▲凌雲丸(東京大学大学院総合文化研究科蔵)

されて新たに参与に任命されました。そして、翌22日には「従四位下^{*}」の位を授けられました。小楠は早速飛脚でこの吉報を家族に知らせていますが、因みに肥後藩主細川韶邦の位は従四位上、世子の護久は従四位下で、知人への手紙に「臣下の自分が一躍従四位下を賜ることに当惑しています」と書いています。

ところで、小楠の京都での住居ですが、収入が増え、従者や来客が多くなる度に大きな家に転居し、12月には京都御所近くの寺町通りに移っています。小楠の病状は相変わらずでしたが、12月26日付の自宅への手紙(小楠最後の手紙になる)には「私は不思議に都にて年を迎える、若者上下22人相手に越年します。外出の時も大勢の供廻りで、俄か大名になったようで可笑しく思います」とあります。小楠は、このような状態で、明治2年の正月を京都で迎えたのでした。

*会津・桑名両藩…幕末当時の会津藩(現福島県)藩主は松平容保(親藩28万石・京都守護職)・桑名藩(現三重県)藩主は松平定敬(譜代11.3万石・京都所司代・容保は兄)。 ◎親藩…徳川将军家分家の大名家

◎譜代大名…関ヶ原戦以前からの徳川家重臣が就いた大名家。
*戊辰戦争…明治元年(1868)1月の「鳥羽・伏見の戦」から上野戦争(彰義隊)・北越戦争・会津戦争を経て同2年5月の箱館戦争までの新政府軍と旧幕府軍との戦。1868年は六十干支(えと)の戊辰に当たる。

*凌雲丸…英國製の蒸気船(鉄製・160馬力・長さ180尺(約48.5m)・荷積高150トン)。

*世子…大名などの後継者。細川護久は兄の細川韶邦の世子。

*徴士参与…諸藩士から選ばれた有才の者が就任した明治新政府の官吏の職名。

*従四位下…官吏の序列を示す等級の一つ。諸臣の位階(位)は、一位～八位・初位からなり、一位～三位は正・従の各二階、四位～八位は正・従をさらに上・下に分けた。三位までを公卿、四位・五位を通貴(大夫)と称し、六位以下との差は大きかった。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。